はじめに

本書はこれまで日本の貨幣（穴銭類）にしか興味を持てなかった私の初めての外国コインへの「挑戦記」となります。

きっかけは平成二八年に名古屋の業者様から薦められた一枚の古代ギリシャコイン（アイオリス・キメのテトラドラクマ貨）でしたが、その後は世界初のコインといわれるリディアのエレクトロン貨やアケメネス朝ペルシャのダリック金貨、シラクサの四頭立ての馬車（クアドリガ）貨やアレクサンダー大王貨などにも気を移しつつ、「フクロウコイン」とも接することとなりました。

幸か不幸か、明くる平成二九年がたまたま一二年に一度の「酉」年ということもあり、これがより一層「フクロウコイン」の収集に拍車を掛けたことは間違いないのですが、そんなことより一度でも古代ギリシャコインに心を奪われた者が「フクロウコイン」から距離を置くことなどできるはずもなく、当然のことながらズルズルとその魅力の虜となっていったのです。

さて、そのような流れの中、「フクロウコイン」を本格的?に収集しようと思った際、まず問題となったのが拠り所とすべき参考書の入手と選定でした。

これが日本の貨幣なら、それこそありとあらゆる分野（古札を除く……）に最適な書が存在するのですが、身近に参考書の乏しい外国（古代）コインとなると、やはり全体像の把握のためにもまずはそちらの入手こそが先決と思われ、海外のサイトでそれらしきものを見掛けては取り寄せるという日々が続きました。

ところが、それらの書を手にして一様に驚いたのが「分類の曖昧さ」でした。

もちろん、多くの書はそれなりに系統立った分類もなされていたのですが、それでも「分類譜とは現物を見て（一目で）、それと分けることができる内容であること」と考える自分にとって、どちらとも取れるような曖昧な分類など、到底許容の範囲といえるものではなく、ならば「自分で分類するしかない」という思いに至ったのです。

残念ながら、周りにこの分野の友人はおらず、ほぼ独学での収集となったため、結果的にはずいぶんと回り道をしてしまうこともあったのですが、その過程で知り得たことをぜひ日本で同じような思いをしておられる収集家の皆様へお伝えするべく、今回も書信館出版株式会社様のお力をお借りし、『収集』誌への連載をお願いした次第で、ご活用いただけるところがありましたら幸甚に思います。

◇目次

はじめに 2

代表コイン紹介 4

①「移行期」類の考察 (2019.7) 14

②「最盛期ＬＥスタイル」の考察 (2019.8) 20

③「中央アジア」の模倣貨 (2019.9) 30

④「アラビア半島」の模倣貨など (2019.10) 34

⑤「小額コイン」について (2019.11) 40

⑥「後半期Ｐｉスタイル」の考察 (2019.12) 44

⑦「斜陽期ニュースタイル」について (2020.1) 52

⑧「黎明期」と「前半期」類について (2020.2) 58

余録

似て非なるもの (2020.4) 66

二五〇〇年もの時を経て (2020.5) 67

その「かわいさ」は反則です (2017.11) 68

女神の横顔に恋をして (2018.7) 70

古代インドのコインから (2020.3) 73

主要参考文献 78

おわりに 79

SEAR2529

BC/c.440-404 BC

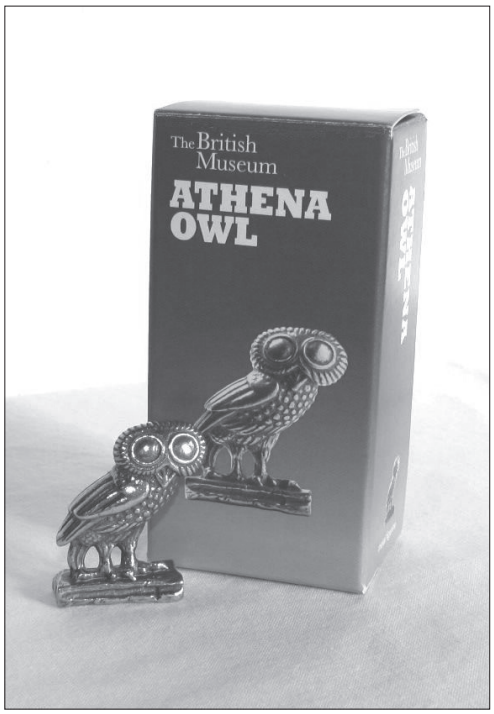
N

G

c.455-440

不苦労夜話①「後ろ姿」

アテネのフクロウコインのデザインは近代コイン等にも採用（復刻）されていますが、いずれも表側のみの描写に留まり、「フクロウの後ろ姿」については想像を働かせるしかありませんでした。

ここに提示させていただくものは、大英博物館のミュージアムショップで販売されているフクロウ（LEスタイル）のミニチュア（高さ35ミリ）ですが、このミニチュアにはこれまでコインでは描かれることのなかった「フクロウの後ろ姿」が違和感なく表現（造形）されています。

こういったスーベニア類は、本来のコイン収集とは全く関係のないもので、手を出し始めると限がないわけですが、「フクロウの後ろ姿」を見ることのできる唯一？のものとしてご紹介させていただきました。